

地域におけるスポーツイベントの研究 (1)

- 菜の花マラソン完走者の満足要因の分析 -

○野川春夫 菊池秀夫 (鹿屋体育大学) 山口泰雄 (神戸大学) 長々原誠 (鹿屋体育大学)

地域活性化 スポーツイベント 完走者 大会運営 満足度

1. 緒言

数多くのスポーツイベントが、地域の活性化や企業のイメージの変革、まちづくり、村起こしあるいは健康増進などの目的で、日本の全国各地で日常茶飯事のように行われている。地域活性化と市民の健康増進を目的とするスポーツイベントの中において、市民マラソン大会は最も普及した身近なスポーツイベントといえよう。

市民マラソンに関する研究は、中高年齢者のランニングの意識の変化 (林ら: 1983)、ランナーの月間走行距離とパフォーマンスの関連 (有吉ら: 1984)、大会参加者が恒常的に参加する要因の弁別 (山下ら: 1984)、海外スポーツイベントに参加した日本人ランナーの参加意識と属性をアメリカ人ランナーとの比較研究 (山田ら: 1988) などがある。しかしながら、年々スポーツイベントが盛んになる中で参加者がイベントのどの側面にどの程度満足しているのかを明らかにした実証的な研究はほとんど行われていない。

従って本研究の目的は、鹿児島県内において地域活性化に成功している代表的な“指宿菜の花マラソン”を対象にして、マラソン完走者の大会における満足要因を明らかにすることによって、今後の大会運営に有益な基礎資料を得ることであった。

2. 研究方法

- 1) サンプル: “指宿菜の花マラソン”フルマラソンの部の完走者509名
- 2) 調査場所: 鹿児島県指宿市総合運動公園
- 3) 調査期日: 1989年1月8日(日)9:00~15:00(第1回)及び
1990年1月14日(日)9:00~15:00(第2回)の2回
- 4) 調査方法: フルマラソンの完走者509名(第1回: 300名、第2回: 209名)を菜の花マラソンのゴール地点において有意に抽出し、質問票を持った15名の調査員が完走者に約15分間の直接面接を実施した(有効回収率100%)。
- 5) 調査内容: サンプルの個人的属性、運動習慣、成績に対する満足度、参加のきっかけ、大会の運営に対する満足度、及び本大会への再参加の希望。なお、大会の運営に対する満足度、及び本大会への再参加の希望に関する項目の測定はLikert-scale typeの4段階評定を採用した。
- 6) 分析方法: 収集したデータは項目別に単純集計を行い、主な項目を年度別、参加回数別、及び居住地別(鹿児島県内vs鹿児島県外)にクロス集計を行った。

3. 結果の概要

本調査では、自己の成績に対して「非常に満足」と答えたサンプルは少なかったが、過半数以上のサンプル(1989年:60%, 1990年:72%)が自分の成績に満足していた。成績に対する満足度は参加回数が増すにつれて低くなる傾向がみられた。また、鹿児島県内からの

参加者は鹿児島県外の参加者に比べて成績に対する不満足感が高かった。

葉の花マラソンの大会運営に対する総体的な満足度は、1989年・1990年のサンプルとも高かった。しかし、大会運営を6つの側面から検討したところ本サンプルの90%以上が「ボランティアの対応」満足しており、スポーツイベントに占めるボランティアの重要性が窺える(図1)。また、「参加賞」「大会のスケジュール(スタート時間等)」にもサンプルの参加回数や居住地に関係なく満足度が高かった。

これに対してサンプルは「トイレの設置場所と数」及び「マラソンコース」に不満を持っており、特に1990年の「トイレの設置場所と数」に対する不満足は1989年とは逆にサンプルの過半数を占め、マラソンの参加回数の多少にかかわらず不評であった。さらに、ランナーの成績に直接関係する「マラソンコース」については、参加回数が多いサンプルほど不満足感が強い傾向がみられた。

4. 要 約

- 1) 「ボランティアの対応」が参加者に高い満足感を与え、スポーツイベントに重要な位置を占めていることから、今後もボランティアの質と量の維持・向上が必要となる。
- 2) 「トイレの設置場所と数」に対する不満が最も高いことから、参加者に分かりやすい場所にトイレを設置したり、参加者数とトイレの数の比率を見直し、参加者数にあった簡易トイレを用意する必要がある。
- 3) 「マラソンコース」は、ランニングタイムに直接影響を及ぼすことから、現状のコースの起伏や複雑さなどを再検討し、参加者が走りやすいコースを設定する必要がある。

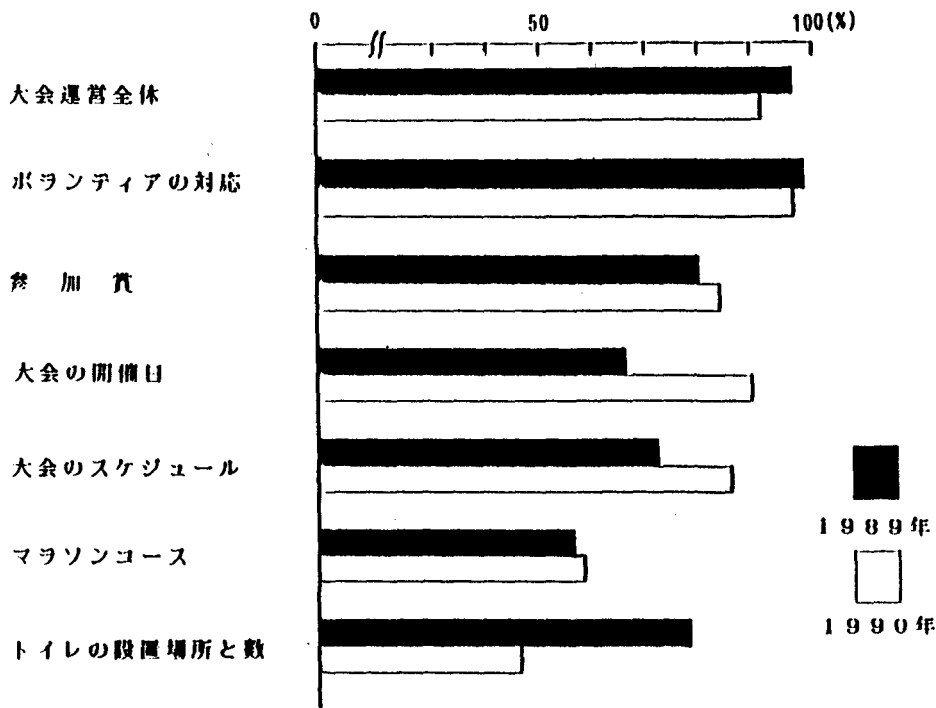


図1. サンプルの満足度(年度別)